

「健全な異性観」

2-(4)健全な異性観

1 / 1 時間扱い

1 題材名 「健全な異性観」

2 題材について



望ましい男女関係の在り方

中学2年生の時期は、次第に物事を客観的に考えることができるようになる一方、精神的に不安定な時期でもある。心身の急激な発達に伴い、異性に対する関心が強まり、それがあこがれとなって近づこうとしたり、独占したいと思ったりする。その反面、自分の感情を素直に表せず、反発的な態度をとったりするなど様々な形で現れる。これは発達段階から見て自然なことであり、それを認めながら、更に望ましい方向に指導していくことが大切である。

中学生期での男女関係は、同性間の友情と同じように、相手をよく理解し、信頼し、互いに高め合うことが必要である。こうした人間として尊重し合い、共に成長していこうとする気持ちが高まってこそ、健全な異性観が育っていく。男女が互いの立場や特性を理解し合い、単に性的な欲求や感情に流されるのではなく、健全な異性観にたった望ましい男女関係の在り方を考えることは大切であると考え、本題材を設定した。

3 目標

- (1) 男女の望ましい人間関係を理解する。
- (2) 男女が互いに理解を深め、相手の人格を尊重する心情を養う。

4 教科、領域等の内容的関連

- (1) 保健体育 「心身の発達と心の健康」
- (2) 学級活動 「性的な発達への適応指導」
- (3) 社会科公民 「個人と社会生活」
- (4) 技術・家庭 「わたしたちの成長と家族・地域」

5 指導展開例

	教師のかかわり	子供の思考の流れ・学習活動	留意点
導入	男女交際や異性の友人についてどのように思っているのだろうか。	人により様々な考えがあることを知る。	事前に男女交際や異性の友人についてのアンケートをとり、グラフなどにまとめておく。

<p>導 入</p>	<p>この時期に異性に関心があるのは自然なことだ。</p>	<p>この時期に異性に関心をもつことは、自然であることを実感する。</p>	<p>(事後に使うこともできる。) (資料3・4) ・発達段階には、個人差があることに留意して指導する。 ・学級の座席は、男女別に分けて座り、椅子だけにするなど工夫をする。 (資料5)</p>
<p>展 開</p>	<p>異性との交際や友情で大切にしなければならないことを考えてみよう。</p> <p>・資料をもとに役割演技(ロールプレイング)で進める。</p> <p>恵子の上岡君に対する態度をどう思うか。</p> <p>恵子は上岡君のどのようなところに引かれたのだろうか。</p> <p>陽子と芳枝の話を聞いて恵子はどのように思ったのだろうか。</p> <p>恵子がうれしく思ったのはなぜか。</p> <p>翌朝、上岡君のさわやかな笑顔を見た時、恵子の気持ちはどのように変わったのだろうか。</p>	<p>登場人物の気持ちを考えながら、演技をする。</p> <p>・相手のことを考えていない ・一方的だ ・腹が立つ気持ちは分かる</p> <p>・スポーツマン ・優しい ・さわやかな笑顔 ・意志が強い ・言葉では表わせない何か</p> <p>・自分はどちらだろうかと迷った ・陽子の様になりたいが、芳枝のことも分かると思った</p> <p>・自分のことを見ていてくれた ・自分の良さを知っていてくれた ・信頼してくれた ・嫌ってはいなかった</p> <p>・上岡君の立場も理解しようと思った ・上岡君に対して更に親しみを持った ・もっと信頼しようと思った ・上岡君を尊敬した</p>	<p>・事前に配役を決めるなどの準備をする。人形劇などにして行うのもよい。</p> <p>・興味本位にならないように、神話の内容を深く考えさせる。</p>
<p>終 末</p>	<p>男女間の友情や交際で大切にしなければならない事は、どんな事だろうか。</p>	<p>男女間の友情や交際で大切にしなければならない事は、どんな事だろうか。</p>	<p>・男女間においても、互いに独立した一人の人格として尊重し合うことが、基本である事を理解させる。</p>
<p>・交際することによって、互いに励みになったり、高め合うことが大切だ。 ・互いに理解を深め、明るく誠実なかかわり方をする。 ・同性間の友情と同じで、相手を理解し信頼と敬愛を深める事が大切だ。</p>			

6 資 料

【資料1】「さわやかな笑顔」(道徳教育推進資料(道徳の手引き)2 平成4年文部省(現 文部科学省) 坂口幸恵 作

それは、先週の金曜日の放課後だった。

「ねえ、今日の日曜、森林公園にサイクリングに行こうよ。」
恵子は、上岡慎吾に誘いかけた。
「だめだよ。その週の土曜に練習試合があるから、日曜あたり猛練習さ。」
「だって、もう芳枝や井上君のオーケーもとっちゃったのよ。」
「そんなの君が勝手に決めたことじゃないか。」
「いいじゃない、一日くらい……。」
「僕はレギュラーなんだから、そんないいかげんなことはできないよ。」
「なによ、いつもサッカーや生徒会ばかり優先するんだから。いいわ、もう頼まない。」
恵子は、プイと慎吾に背を向けて立ち去った。
それきり、慎吾とは、三日も口をきいていない。

放課後の図書室は閑散としていて、人影もまばらである。昼休みの図書室での閲覧者はけっこう多いのだが、放課後はほとんどの生徒が部活動に参加しているので利用者が少ない。
「放課後の開放なんかやめてしまえばいいのよね。」
退屈そうに芳枝がぼやく。
「図書委員の私たちがそんなことを言ったら、ますます利用者が減っちゃうじゃない。」
読書好きの恵子としては、図書室利用者の増加を願っているのだから、芳枝のぼやきなんかにかまっていられない。
「ここ数日、おこりっばいじゃないの。さては、上岡君となにかあったね。」
今度は興味しんしんという風にニヤニヤしながら、芳枝が近づく。
「そんなこと関係ないじゃない。」
恵子は、痛いところをつかれてますますご機嫌ななめだ。

夕日が沈む頃の図書室は、本に囲まれているというだけでなんとなく恵子の心を落ち着かせてくれる。(今日はこれを読もう。)と毎日一冊は、本を手にはしている。全部読み切るときもあれば、二、三ページで飽きてしまうこともある。しかし、本の世界に入り込むことが一種の精神安定につながっている。芳枝の話をさげぎるために、何気なく手にしていた今日の本に目をやった。それは上岡慎吾のことが気にかかっていただけにいつもとはちょっと違ったギリシャの「神話」の本だった。

古代のギリシャにはこんな神話があります。神様が最初につくられた人間の原型というのは、一つの丸い胴体に頭が二つ、手が四本、足が四本あったのだそうです。その姿は、男の背中と女の背中がくっついているようなものだったと想像してください。その名前はアンドロギュノスといいました。このアンドロギュノスは頭が二つあるので、絶えずおしゃべりをしてうるさくしていました。その上、神様に無礼ばかりを繰り返していました。そのため、とうとう神様の怒りをかい、アンドロギュノスは体を二つに切り離されてしまいました。神様は切り離れた一方を男、他方を女という人間にしました。男と女は、二つに切り離された後も、アンドロギュノスだったころの半身にあこがれ、自分の半身に出会うことを求めるようになりました。人間は二つに分けられた自分の半身と一つになって本来の体になることをそれ以来頭の中に植えつけられてしまったのです。だから、今も男性は女性を求め、女性は男性を求めるようになったというのです。そうしないと、心が不安定で寂しいのです。これはもちろん、アダムとイブのような神話の一つですが。

「男子が女子にひかれたり、女子が男子にあこがれたりするには、こんな理由があったのか。」
読んでいるうちに、恵子はなんだか不思議な世界に迷い込んだような気持ちになっていた。
「不思議な感じがするなあ。」
恵子のひとりごとに、芳枝が耳をそばだてる。
「上岡君のことじゃないの。」
芳枝も興味深げにのぞきこむ。
「(私は、なぜ上岡君が好きなのだろう……。スポーツマンだということ、優しいということ、そして、あのさわやかな笑顔も……。でも……。)」
恵子が、あれこれ思いをめぐらせていると、二人の会話に、陽子も加わってきた。
「ああ、その神話ね。私も二年生になって借りたことがあるわ。」
「木内君のこと考えながら読んだんじゃないの。」
芳枝が、ちゃかしながら口をはさむ。そんなことは気にかげずに、陽子が続ける。
「私は、人を好きになることはいいことだと思う。相手の目を意識するから、自分も向上しようって努力するし……。」
木内君と勉強でも委員会活動でもよきライバルである陽子らしい発言だった。
「それは、陽子が意志を強くもって、冷静に行動できるからよ。私なんて、かえって気になりすぎて、他のことが手につかなくなっちゃう……。」
芳枝が反論する。
「私は……。」
言いかけて、恵子は言葉を飲み込んだ。
「男女はなぜ恋をするのかー。」
答えはみつからなかった。

家に帰ってからも、恵子は図書室での話が忘れられなかった。二階に上がって宿題に取りかかるが、なかなかかかどらなかつた。
(今までは上岡君へのあこがれの気持ちを軽く考えていたけど、こういう気持ちになるのにはそんな理由があったのか。だとすると、今までの私の行動は、上岡君にどう映っていたのだろうか。)

階下から母の呼ぶ声がした。
「恵子、電話よ。」
電話に出ると、陽子だった。
「恵子、頼みがあるんだけど。今日の中央委員会で生徒会新聞を作ることになったの。それでね、我がクラスからも新聞係を選ばなくてはならないの。それを恵子にやってほしいの。」
文章を書くことは、決して苦手ではない恵子だから、クラスメイトの陽子に認められたことはまんざらでもなかった。
「でも、私よりもっと上手な人たくさんいるじゃない。」
「それがね、上岡君の推薦なのよ。恵子にぴったりの仕事だからぜひって。」
「えっ、上岡君が……。」
恵子は、いつもそっけないとばかり思っていた上岡慎吾がちゃんと自分のことも見ていてくれたのだと思うとうれしかった。

翌日、学校へ着くと、サッカー部の朝練習のためにいつもより早く慎吾が来ていた。一瞬、何て言ったらよいかとまどった。もじもじしている恵子に、
「おはよう。」
と、慎吾の方からあいさつしてきた。慎吾のさわやかな笑顔に、恵子の先週からの悩みがふっきたような気がした。恵子は、

一つ深呼吸をした。
「おはよう、上岡君。」
「陽子から聞いてくれたかな。新聞係の話。」
「ええ。どうしようかな……。」
「もったいつけないで頼むよ。恵子は文章書くの得意じゃないか。」
「うん……。」
「僕も手伝うからさ。」
「本当はね、とっつもうれしかったの。上岡君が私のことを認めてくれたこと。」
「なんだよ。だめかと思って心配したじゃないか。」
慎吾のホッとする顔を見て、恵子はもっと素直になれた。
「なんだか、自分が見えてきたみたい……。私のことを第一に考えてなんて虫がよすぎたわ。」

【資料2】ワークシート設問例

- ①このような恵子の上岡君に対する態度をどう思うか。
- ②恵子が上岡君に自分の感情を積極的に伝えるのは、どうしてだろうか。
- ③自分が恵子だったら、どのような態度で上岡君に接するだろうか。
- ④上岡君が新聞係に推薦してくれたことを陽子から聞いた時、恵子はどんな気持ちだったろうか。
- ⑤翌朝、上岡君の笑顔を見た時、恵子の気持ちはどのように変わったろうか。
- ⑥男女の友情や交際で、大切にしなければならぬことにはどのようなものがあるだろうか。

【資料3】事前アンケート質問例

- ①あなたは異性と親しくなりたいと思ったことがありますか。
ある ・ ない
- ②あなたは気軽に話ができる異性の友人がいますか。
いる ・ いない
- ③あなたは異性の友人が欲しいと思いますか。
強く思う ・ 思う ・ あまり思わない ・ 全く思わない
- ④あなたは異性の友人をどう思いますか。
普通の友人 ・ 親友 ・ ボーイ（ガール）フレンド ・ 恋人

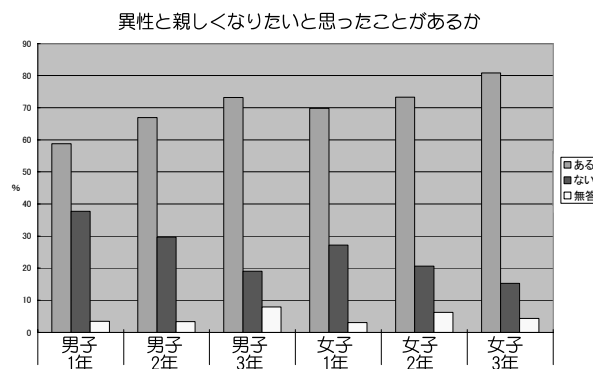
【資料5】座席の工夫例

- ・シアター形式に座ることで、演技を見ることに集中できる。
- ・ロールプレイを見る生徒はいすだけにするすることで、演技者との距離感を減らすことができ、見ている生徒は感情移入しやすくなる。
- ・座席は話し合わせる内容によって、男女別の座席にしたり、小グループにするなどの工夫をする。

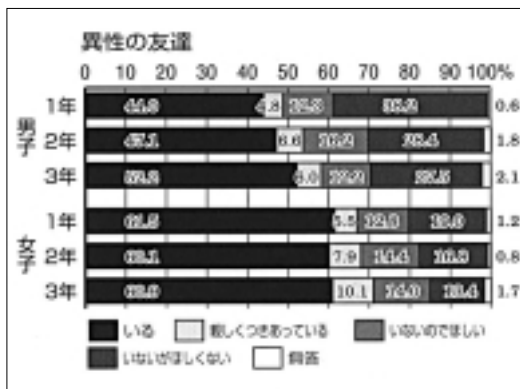
「どうしたんだよ。急に……。」
慎吾のとまどいなど気にしていないかのように恵子が続ける。
「上岡君は、生徒会の仕事も忙しいし、サッカー部のレギュラーなんだということも考えなくちゃと思って。」
「へえ。今日の恵子は、ずいぶん僕のことを考えてくれるんだね。僕だって、本当は……。」
そう言いかけて、慎吾は校庭へと走り去った。「本当は……」の後に続く言葉が何なのか。ともかく、素直になった分だけ、慎吾が身近になったように思えた。恵子には、まだ上岡慎吾がアンドロギュノスだった頃の自分の半身なのかはわからない。でも、これまでとは、少し違う自分たちになったと感じる。
「上岡君、今度の試合がんばってね。私、応援に行く。」
恵子の声が弾んだ。

【資料4】アンケート集計例

①異性と親しくなりたいと思ったことがあるか



②現在、異性の友人がいるか



(2002年調査 児童・生徒の性 - 東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識、性行動に関する調査報告 - 東京都性教育研究会 学校図書)

